

ながさき布教団報

—第20号—

2022(令和4)年12月

- ① ご報告
- ② お知らせ
- ③ ひとこと法話

①【ご報告】

●第7回 長崎教区布教大会～長崎西組～

2022(令和4)年10月18日(火) 13:30～16:30

会処:唯念寺(長崎市磯道町568)

もともとの開催予定から2年越し、3年ぶりの開催となり、近隣各地のお同行が挙って聴聞にお運びくださいました。会処の唯念寺様ご住職はじめ門徒総代様がた、仏婦の方々など皆様の種々のおもてなし、沢山のご協力を頂戴しました。また、ご参詣のお同行がたにもマスク着用や手指消毒等にご協力いただき有難うございました。お陰様で盛大の裡にも恙無く開催することができ、厚く御礼申し上げます。

今後も、阿弥陀様のお心に一人でも多くのかたが出遇っていただけるよう、団員の布教研鑽に取り組んでまいります。引き続きよろしく願いいたします。



木山響心師(大村市 真楽寺)



中山淳哉師(諫早市 教専寺)



三浦唯正師(島原市 浄源寺)



末永正道師(新上五島町 円福寺)



唯念寺の皆様



唯念寺の皆様



唯念寺ご住職



②【お知らせ】

●法話の勉強会

2月13日(月) 本願寺長崎教堂で午後4時から

③【ひとこと法話】

くわど
桑土

こうせい
宏生師 (島原南組 西方寺)

『慈悲のころ』

仏教で実践の中心に置かれていることは慈悲です。つまり、苦しみに対しては人々が助け合っていく。苦悩にうちひしがれる人に接して、慈悲をかき立てられ、その人を何とかしたいと思うということです。

宮沢賢治の『雨ニモマケズ』の詩には慈悲の実践が書いてあります。

東に病気の子供あれば 行って看病してやり
西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば 行ってこわがらなくてもいいといい
北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろといい

と、ここまでは具体的なサポートの内容が書かれているのですが、印象深いのは次の一節です。

日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き

日照りで作物の栽培が大変な時は、雨の一粒にもならないけれど、涙を流すだけでいい、冷害の夏は、ただ無力におろおろと歩くだけでもいい。

具体的に何もできないけれど、一緒に困った困ったとおろおろしてくれる人がいるだけでも、人の心を癒したり、なぐさめたりすることができる。

重要なことは、苦しんでいる人がいたら、おろおろして心に寄り添うだけでいいのです。

具体的なサポートは何一つできなかったとしても、相手の気持ちに寄り添う思いこそが、

困難に向かって立ち上がっていく底力となるのです。

そういう思いと寄り添いが、コロナ感染拡大の困難の中に光を見い出すことでしょう。